

ホッブズにおける競争と情念の世界

——マクファースンのホッブズ解釈をめぐって——

高 木 正 道

はじめに

- I 差異の追求としての競争
- II マクファースンのホッブズ解釈
- III ホッブズにおける情念の世界

はじめに

C・B・マクファースンは、十七世紀のイギリスを代表する政治思想の諸潮流——ホッブズ、平等派、ジェイムズ・ハリントンおよびロックの政治思想——を扱った『所有的個人主義の政治理論』において、かれらの政治理論に共通する思想的特徴を「所有的個人主義」(possessive individualism)と名づけ、この所有的個人主義の思考が暗黙の前提としている社会のモデルを明らかにするために、三つの社会モデルを構成している。すなわち、(1)「慣習的または身分的社会」、(2)「単純市場社会」、(3)「所有的市場社会」がそれである。⁽¹⁾ 詳しい説明はここでは省略するが、第三の所有的市場社会の示差的特徴は、第一の慣習的・身分的社会との対比においては「仕事や報酬の権威的割当のない社会」であるという

点に、また第二の単純市場社会との対比においては「生産物と同様に労働にも市場が存在する社会」であるという点に存する。要するにそれは、一般に資本主義社会と呼ばれているものと実質的に一致するモデルなのであるが、この社会モデルの本質的特徴としてマクファーンが強調しているのは、次の二点である。第一は、それが完全に競争的な市場社会であるということ、第二は、そこでは人間の労働力が商品になっているということ、マクファーン独特の表現を用いて言い直せば、ある人から他の人への力の平和的な移転が許容されている（これについては、第Ⅱ節で詳しく述べる）ということである。そしてマクファーンは、『所有的個人主義の政治理論』で取り上げられた政治理論のうちでは、ホッブズのそれがこのような所有的市場社会のモデルに最も適合的である、と主張している。

結論を先取りして言えば、私も、ホッブズが描き分析している社会が競争的な社会であるということには異存がない。だが、問題は、それがどのような型の競争社会かという点にある。それは決して経済学が一般にその考察対象として前提している純粋な市場社会、つまり、プライス・メカニズムが唯一の支配原理であるような市場社会ではない、と私は考える。また、ホッブズはある人から他の人への力の平和的な移転をかれの社会モデルの不可欠の要件とみなしていた、というマクファーンの見解にも同意できない。以下、その理由を述べていくが、まずホッブズの社会がどのような型の競争的社会であるかを明らかにするために、いささか唐突で場違いに思われるかもしれないが、岩井克人氏の「遅れてきたマルクス」(『ヴェニスの商人の資本論』所収)をおさらいするかたちで、マルクスの特別剰余価値の理論とシュンペーターの新結合の理論を説明することから始めたい。

(注)

(1) マクファーンモデル構成の欠陥とそれに起因するモデル分析の問題点については、拙稿「十七世紀イギリスにおける使用

人と労働者——マクファーンソンのロック解釈をめぐって——、『法経研究』（静岡大学）三二巻三号（一九八三年十二月）、二五
六—六〇ページを参照。

I 差異の追求としての競争

マルクスの特別剰余価値の理論

マルクスの理論によれば、「剰余価値」は、産業資本家が購入する労働力と生産手段の価値と、それらを用いて生産する商品の価値との差異から生まれる。つまり、資本家は、労働市場で商品として購入した労働力と財の市場で購入した生産手段とを結合して生産を行うが、これによって生産される商品の価値は、労働力の再生産に必要な生活資料の価値（Ⅱ労働力の形で支払われる労働力の価値）と生産過程で消費あるいは消耗した様々な生産手段の価値との合計以上になる。まず最初に産業資本家の手に入るこの超過部分が「剰余価値」であり、それはさらに産業利潤、商業利潤、利子、地代等に分割されるのである。

もう少し説明を加えれば、剰余価値は二通りの仕方で作出される。一つは、生産性一定（したがって労働力の価値不変）という条件下で、労働時間を延長ないし労働を強化するという方法であり、これを「絶対的剰余価値」の生産という。もう一つは、労働時間不変あるいは労働の強度一定という条件下で、生産性を高めることによって労働力の再生産に必要な生活資料の価値（だから労働力の価値）を低下させるという方法である。これは「相対的剰余価値」の生産と呼ばれる。といっても、後者の場合、個々の資本家は相対的剰余価値の獲得を直接の目的として生産性の向上に努めるわけではない。かれらを生産性の上昇へと駆りたてる直接の動因は、「特別剰余価値」（またはその具体的形態としての「特別利潤」）である。

この特別剰余価値は、社会的価値と個別的価値との差異から生まれる。市場社会において商品の現実の価値を決定するのは、その商品の生産に個別的に必要な労働時間（個別的価値）ではなく、社会的平均的に必要な労働時間（社会的価値）である。したがって、社会的標準的な生産条件よりも優良な生産条件で生産している資本家は、商品をその社会的価値よりも低い個別的価値で生産しながら、しかも生産した商品をその社会的価値で販売することができるので、通常の剰余価値（利潤）に加えて、商品一単位につき『社会的価値マイナス個別的価値』の追加的剰余価値（利潤）を取得しうることになる。これが、特別剰余価値（特別利潤）にほかならない。個々の資本家が新しい生産方法の導入により生産性を上昇させるさいの直接の獲得目標は、この差異としての特別剰余価値（特別利潤）なのである。劣等地が耕作に利用されることによって既存の耕地が優等地化され、そこに差額地代が発生すると同様に（あるいはむしろ、逆に、とすべきか）、優良な生産方法の出現は既存の生産方法を劣等化し、新生産方法をいち早く導入した資本家たちの手に「差額利潤」とも呼ぶべき特別剰余価値を発生させるのである。

ところで、この特別剰余価値の存在は、決して長続きしうるものではない。特別剰余価値を成立させた生産性の上昇は、市場が拡大されない限り供給過剰を引き起こすので、新生産方法で生産する資本家は、増加した生産量を捌くためには、自己の商品を（その個別的価値以上ではあるが）その社会的価値以下で売らざるをえなくなり、かくして市場価格が低下していく。他方、古い生産方法に頼っている資本家たちは、市場から淘汰されるかもしれないという危険に晒され、新生産方法の採用を余儀なくされる。その結果、特別剰余価値の発生を可能にさせた改良された生産方法がその産業部門全体に普及し、それが社会的標準的な生産方法となると、社会的価値は今や改良された生産方法による個別的価値と等しくなり、特別剰余価値は消滅してしまうからである。このように生産性の高い新生産方法が一般化し、特別剰余価値が消滅していくのと平行して、その部門で生産される商品の価値も低下していく。そしてその商品が、労働者階級の慣習的な生

活資料の範囲に属するかまたはそれに代りうるものであれば、労働時間が短縮されない限り、一般的な剰余価値率が上昇し、当該部門の資本家だけでなく、資本家階級一般の手に相対的剰余価値が入る。つまり、相対的剰余価値は、特別剰余価値の獲得を主観的動機とする個々の資本家たちの行動の意図せざる客観的結果として発生するのである。

このように、特別剰余価値の存在は永続しえないが、その成立と消滅の過程はまた決して一回限りで終わるものではない。反対に、それは永遠無窮の運動である。一旦ある剰余価値が消滅しても、再び競争の強制法則が、個々の資本家たちを新たな特別剰余価値の追求へと駆りたてるからである。競争社会のサバイバルゲームで勝利者として生き残るためには、資本家たちは、絶えず他に先んじて他を凌駕するこの差異を創りだすことに狂奔しなければならない。それゆえ、ある特別剰余価値の消滅は、次の新たな特別剰余価値形成の契機を成している。特別剰余価値の個としての一時性が、その種としての永続性を媒介していると言うこともできるであろう。淀みに浮かぶうたかたの如く、かつ消えかつ結びて、消滅と再生の過程を繰り返すこの差異としての特別剰余価値こそ、資本主義社会における経済発展の推進力なのである。

シュンペーターの新結合の理論

シュンペーターは、マルクスを極めて高く評価した例外的な近代経済学者の一人であった。例えば『資本主義・社会主義・民主主義』においてかれは、マルクスの「窮乏化論」を「分析においてもヴィジョンにおいても救いようのない代物である」と酷評しているが、他方でマルクスは「恐慌とは区別された意味での景気循環の問題を誰よりも先に取り上げた」と述べ、「マルクスの理論的微罪を覆すほどの真に偉大な一つの業績」として、「各瞬間に自ら後続のものを規定するような状態を生みつつ、自力で歴史的時間のなかを進行するが如き経済過程の理論」という着想を挙げ、さらに「マルクスが成し遂げた経済学の方法論」の「根本的な重要性」について次のような賛辞を与えている——それまでは「事実と理

論とは単に機械的に結びつけられていたにすぎない」のたいし、「マルクスは結論を生みだす議論そのものなかに経済史的事実を導入したのである。かれは、経済理論がいかにして歴史的分析に転化されうるか、また歴史の物語がいかにして理論的歴史に転化されうるかを体系的に理解しかつ教えることにおいて、最も優れていた最初の経済学者であった。」

シュンペーターは、同書でさらに次のように語っている。「およそ資本主義は、本来経済変動の形態ないし方法であつて、決して静態的でないのみならず、決して静態的でありえないものである。しかも資本主義過程のこの発展的性格は、ただ単に社会的自然的環境が変化し、それによってまた経済活動の与件が変化するという状態のなかで経済活動が営まれる、といった事実に基づくものではない。……さらにまたこの発展的性格は、人口や資本の準自動的增加や貨幣制度の気まぐれな変化に基づくものでもない。……資本主義のエンジンを起動させ、その運動を継続させる基本的衝動は、資本主義的企業の創造による新消費財、新生産方法ないし新輸送方法、新市場、新産業組織形態によって引き起こされるのである。」「不断に古きものを打ち壊し、新しきものを創り出して、絶えず内部から経済構造を変革する産業上の突然変異」

「この『創造的破壊』の過程こそ、資本主義についての本質的事実である。それはまさに資本主義を形造るものであり、すべての資本主義的企業がそのなかで生きねばならぬものなのである。」「資本主義を取り扱うさいに把握しておかなければならない本質的な点は、われわれが発展的な過程を取り扱っているということである。これほど明白な事実、しかもずっと前にカール・マルクスによって強調されていた事実を見逃す人がいるのは、まったくおかしいと思われるかもしれない。だが、現代の資本主義の機能に関する数多くの命題をわれわれに与えてくれているあの断片的分析は、頑強にこの事実を無視しているのである。」

資本主義のダイナミックな本質を看破しえた点でマルクスをこのように高く評価したシュンペーターではあるが、かれが自己の理論体系の基礎に据えたのはマルクスの理論ではなかった。シュンペーターが自らの経済発展の理論の出発点と

して選んだのは、かれが最大級の賛辞を惜しまなかったレオン・ワルラスの「一般均衡理論」である。ワルラスは純粋経済学を「完全な自由競争という仮説的な制度のもとにおける価格決定の理論」(『純粋経済学要論』第四版への序文)と規定しているが、シュンペーターの経済発展の理論との関連で注目すべき事柄は、ワルラスの一般均衡体系においては「利潤」がゼロになるという一種の「不条理」である。

ワルラスが想定しているのは、「常に競争の点から見て完全に組織された市場」である。かれは、「純粋主義の時代」⁽¹⁾の幕開けを経済学の分野で告知した人にふさわしく、「これは、純粹力学で最初に摩擦のない機械を仮定するのと同様である」と言う。この市場は、買い手は互いにより高く需要しようとし、売り手は互いにより安く供給しようとして競い合っている、巨大な株式取引所のようなものにはかならない。そこには、三種類の生産要素の所有者が登場する。すなわち、土地の所有者としての地主、人的能力(労働力)の所有者としての労働者、狭義の資本の所有者としての資本家がそれぞれある。これら三種類の所有者とは別に、「地主から土地を、労働者から人的能力を、資本家から資本を借り入れ、これら三つの生産用役を、農業、工業または商業において結合することを職分とする第四の人格」を、ワルラスは「企業者」と呼ぶ(かれはこれらの職能を生産機構における機能の観点から定義している)。同一人物が複数の異なった機能を兼ねることができ、生産の舞台で主役を演じる企業者は、「用役の市場」において、他の企業者から原料を購入し、地代を支払って地主から土地を賃借し、賃金を支払って労働者の人的能力を賃借し、利子を支払って資本家の資本を賃借し、最後にこれらの生産用役を原料に適用することによって生産物を得る。そしてかれは、もう一つの市場である「生産物の市場」でこの生産物売る。

この場合、もし生産物の売価が生産用役の費用より大であれば、その差額は「利潤」として企業者に帰属する。しかし、

完全な自由競争が行われている市場においては、こうした状況が起これば、既存の企業者は「利潤」の増加を求めて増産するであろうし、また他の企業者がこの部門に参入してくるであろう。その結果、供給量が増加するため、価格は下落し、差益は減少する。逆に、生産費がその売価よりも大であれば、当該部門の企業には損失が生じるため、企業者は他の部門に移るか、または減産するであろう。その結果、供給量は減少し、それが価格を上昇させ、差損を減少させる。したがって、「生産の均衡状態においては企業者は利益も得なければ損失も受けない。この場合、企業者は企業者として生計を立てるのではなく、自分または他人の企業において地主、労働者または資本家として生計を立てるのである。私の意見では、合理的な会計をしようとするれば、自分で耕作する土地または自分が所有する土地の地主である企業者、自分の企業の経営に当たる企業者、事業に投下した資金を所有する企業者は、生産用役の市場の率で計算した地代、賃金、利子の一般経費を借方に記入し、またこれを自分の勘定の貸方に記入しなければならない。そして、この方法によって企業者としては厳密に利益も損失も受けないでいて生計を立てられるのである。そして実際に、もし企業者が自分の企業において、自分の生産用役から、他の企業で得られるよりも高いまたは低い価格を得るとすれば、かれはその差だけ利益または損失を受けることになるのは明らかである。」

このように、ワルラスによれば、「生産および交換に自由競争の規則が適用される場合に、自然にそれに向かって落ちついてゆくであろう」、「理念的状态であって、現実の状態ではない」極限状態においては、「利潤」は存在しえないのである。シュンペーターがその経済発展の理論の出発点として援用したのは、このようなワルラスの「無利潤論」であった。

ワルラスの体系においては、もし「利潤」が成立しているとすれば、それはなんらかの理由で完全な自由競争が阻害されているか、そうでなければいまだ均衡が達成されていないことによるものである。これにたいしてシュンペーターの

『經濟發展の理論』においては、利潤は、「摩擦」などの非本質的な要因による場合を除けば、「新結合の遂行」としての「發展」からのみ生ずる。その担い手は、進取の精神に富んだ企業者である。生産用役を単に「結合」するにすぎない企業者から、生産的諸力の「新結合」を自らの能動的機能とする企業者への、この企業者概念の転換こそ、ワルラスの一般均衡理論という静学的土台のうえに動学的建造物としての經濟發展の理論を築くにさいして、シュンペーターが敢行した決定的に重要なイノベーションであった。そしてこのようなシュンペーターの企業者像は、資本主義社会において生産が果たしている積極的な役割に関する、当時としては非常に斬新な理解と密接に結びついていた。「經濟的觀察は、欲求充足があらゆる生産活動の基準であり、その時々には与えられる經濟状態はこの側面から理解されなければならないという根本的事実から出発するものであるとしても、經濟における革新は、新しい欲望がまず消費者のあいだに自発的に現われ、その圧力によって生産機構の方向が変えられるという具合に行われるのではなく——われわれはこのような因果関係の出現を否定するものではないが、ただそれはわれわれになんら問題を提起するものではない——、むしろ新しい欲望が生産の側から消費者に教え込まれ、したがってイニシヤチブは生産の側にあるという具合に行われるのが常である。」実にシュンペーターは、ガルブレイスが「依存効果」と名づけた現象についての認識を先取りしていたのである。

さて、シュンペーターによれば、かれのいう「一定条件に制約された經濟の循環」という均衡状態においては、「企業者利潤」は（また利子も——これはワルラスの均衡体系との相違点である）存在しない。そこでは、生産物の価格は労働用役と自然用役の価格（賃金と地代）の合計に等しくなるからである（この場合、いまだ新結合を遂行していない潜在的企業者が生きていけるとすれば、それはかれ自身の労働用役に帰属する經營の賃金またはかれの土地用役に帰属する地代による）。この均衡状態を打ち破るものが、企業者による新結合の遂行にはかならない。といっても、あらゆる新結合が經濟發展に係わるわけではない。単なる成長ではなく、經濟發展のバネになるのは、例えば馱馬車から鉄道への変化のよう

に、循環軌道の変更をもたらす非連続的な新結合である。ところで、一般に新結合は、単に旧結合にとって代わるのではなく、ひとまずこれと並んで出現する。新結合が旧結合と並んで現われるというこの事情は、新結合の遂行に伴う諸現象を理解するうえで決定的に重要な意味をもつ。費用超過額、すなわち事業経営における収入と支出の差額としての「企業者利潤」は、まさにこの事情から説明される。つまり、「循環においては経営の総収入は——独占利潤を別として——支払われた支出をちょうど償うに足るだけの大きさである」のにたいし、「発展において遂行される新結合は旧結合よりも必然的に有利であるから、そこでは総収入は静態的経済におけるそれよりも大きく、したがってその支出よりも大きい」ことになり、その差額ないし超過分が「企業者利潤」として新結合の遂行者の掌中に流れ込んでくるのである。

例えばかりに、手織機（旧結合）だけで生産が行われている綿織物産業に、より生産性の高い力織機（新結合）が導入されたとすれば、一方では手織機のみが用いられていたときに成立していた均衡価格（費用価格）に依存して決まってくる収入と、他方では生産物一単位あたりについて他の経営よりも少なくなった支出とのあいだに差額が生まれる。勿論、供給量の増加による綿布価格の下落や綿織布に必要な生産用役の価格上昇などは、この差額を縮小するように働くであろう。がしかし、その差額は直ちに消滅するわけではなく、それゆえ力織機を導入した企業者はしばらくのあいだ「企業者利潤」を獲得することができ。だが、今や第二幕が始まる。「魅惑的な利潤の刺激のもとで力織機をもった新しい経営が続々と成立する。」こうした追隨的模倣の群生の「究極の結果」は「一つの新しい均衡状態」である。「そこでは新しい与件のもとに再び費用法則が支配し、生産物の価格は今や、力織機のなかに含まれている労働用役および土地用役にたいする賃金と地代に、その生産物を作るために力織機に付加される労働用役および土地用役にたいする賃金と地代を加えたものに等しくなる。」かくして、力織機を最初に導入した経済主体および当初の後続者たちの純収益、すなわち企業者利潤は消滅する。競争経済の機構そのものが持続的な余剰価値の存続を許さず、むしろほかならぬその機構の原動力である

利潤追求の刺激によって剰余価値は消滅させられるのであるが、そのことがまた新たな利潤追求への刺激として作用し、新たな剰余価値が再び生みだされる。不均衡化のベクトルとしての革新と、均衡化のベクトルとしての模倣の波及とのシソーゲームによる産業構造の再編成を通じて、経済はまさに発展するのである。

シュンペーターの新結合の理論の世界を去るにあたって、それをマルクスの特別剰余価値論の世界と比較してみよう。何が変わったのだろうか。変わったのは利潤である。どう変わったのであろうか。岩井氏に倣って言えば、マルクスにとっては相対的剰余価値を創出するための単なる媒介にすぎなかった「特別」利潤は、シュンペーターによって、資本主義経済における利潤のいわば「一般的」形態にまで引き上げられたのである。イノベーションとは未来の価格体系の先取りにほかならず、革新に成功した企業は、この未来の価格体系と現在の市場で成立している価格体系との差異から利潤を獲得するのである。リカードの地代論には絶対地代がなく、存在するのは差額地代だけであるのと同様に、シュンペーターの経済発展論においては、生産手段の私的所有者たる資本家階級による労働者階級の搾取に基づき、「絶対利潤」ともいふべき通常の利潤（平均利潤）は存在せず、革新の優先的実現をめぐって競争する企業どうしの相互「搾取」から生じる「差額利潤」としての企業者利潤が、利潤の唯一の形態なのである。

いわゆる「ポスト産業資本主義」としての現代資本主義の分析にふさわしく仕立てあげられたこのシュンペーター・岩井理論にも、疑問の余地が残されていないわけではない。企業どうしが相互「搾取」の茶番劇を演じている舞台の裏で、資本家による労働者の搾取という悲劇——それはもはや悲劇性を失っているとしても——が依然として繰り返されているのだろうか。遠隔地貿易の拡大・発展は地域間の価格体系の差異を縮め、商業資本そのものの存立基盤を切り崩していくとしても、産業資本家と、資本主義経済の「内なる遠隔地」としての労働者階級との交易は、岩井氏の言うように、

「自らの運動によって剰余価値発生の基盤そのものを切り崩していく仕組みを内に秘めている」のだろうか。未来に遠隔地を創り出す革新は、また同時に既存の内なる遠隔地を維持・拡大する効果を及ぼす場合もあるのではなからうか。

本稿のタイトルを「ホッブズにおける競争と情念の世界」と題しておきながら、私はこれまで、岩井氏の二番煎じよろしく、マルクスの特別剰余価値の理論とシュンペーターの新結合の理論について、退屈な講釈を長々行ってきた。このような脱線をあえて行った理由は、本節に入る直前に述べておいたように、ホッブズの社会がどのような型の競争社会であるかを確認するためである。ここでも再び結論を先取りして言えば、ホッブズの競争社会は、マルクスの特別剰余価値論およびシュンペーターの新結合の理論における競争社会と同型なのである。節を改めて、ホッブズの描く競争社会を覗いてみよう。

(注)

(一) これについては、土屋恵一郎『社会のレトリック——法のドラマトウルギー——』新曜社、一九八五年、三ページ以下を参照。

II マクファアソンのホッブズ解釈

アダム・スミスといえはすぐに「見えざる手」という言葉が浮かんでくるように、トーマス・ホッブズ(一五八八—一六七九)の名前を聞くと、条件反射的に「万人の万人に対する闘争」という暗い光景が連想される。だが、それがどのような状況であるかを具体的に説明する段になると、われわれは自分がそれについてあまり明確なイメージをもっていないことに気づく(「見えざる手」についても同様のことが言えるが)。万人の万人に対する闘争、ないしそれに必然的に至る

自然状態とはいかなる状況なのかを少し詳しく知るために、われわれはC・B・マクファーンに導かれて『リヴァイアサン』の世界に足を踏み入れることにしよう（以下、『リヴァイアサン』については、参照すべき章だけを指示する）。

ホッブズのいう自然状態は、一般に認められているように、歴史的仮説ではなくて論理的仮説である。といっても、それは、マクファーンによれば、歴史的に獲得された人間たちの諸特性を完全に無視することによって達せられた論理的仮説ではない。つまり、ホッブズは、文明人と対置された「自然人」の行動を問題にしているのではない。自然状態として描かれているものは、文明社会の生活のなかで形成された性質や欲望をもった人間たちが、もしかれらを威圧しうる共通の権力が取り除かれ、法や契約を強制するどんな権威も存在しないとしたら、必然的に陥るにちがいない仮説的状态およびそこでのかれらの行動である。自然状態を得るために、ホッブズは法を排除したけれども、人間たちの社会的に獲得された欲望や行動様式を排除しなかつたのである。⁽¹⁾かれが人間の本性のなかに見出した争いについての三つの主要な原因、すなわち、〈競争〉(Competition)と〈不信〉(Diffidence)と〈自負〉(Glory)は、決して獸的な自然状態だけの特徴ではなく、もしそれらを抑制する共通の権力がないとしたら、市民社会をその獸的状态に変えることになるような、現代市民社会内の要因である。ホッブズにとって「自然的」というのは、「社会的」もしくは「市民的」の反対語ではない。人類の自然的状況は現在の人々の内にあるのであって、遠い時代とか離れた場所に存在するのではない。だからこそホッブズは、『リヴァイアサン』の読者に、「かれもまた自分自身のなかに同じものを見出さないかどうかをよく考えてみる」〔序論〕よう求めているのである。このように、かれが分析していたのは、かれの同時代人たる文明人の本性以外の何物でもなかつた。

では、ホッブズが文明人のうちに読み取った人間の本性（自然）とはいかなるものであろうか。以下しばらく、これに

ついでマクファーンソンの説くところをフォローしてみよう。

(1) 人間は欲求 (Appetite) と嫌悪 (Aversion) によって動かされる (第六章)。

(1 a) 欲求と嫌悪には、生得的なものと、経験から生じるものがある (同前)。

(1 b) 欲求と嫌悪は絶えず変化するし、また人によって違っている (同前)。

(1 c) 欲求は、人間が生きている限り働き続ける (同前)。「欲望 (Desires) が終熄してしまった人間は、感覚 (Senses) と想像力 (Imaginations) が停止してしまった人間と同じく、もはや生きてはいられない」(第十一章)。

(1 d) 欲求の強さは人によって異なる (第八章)。

最後の二つの命題を一緒にすると、すべての人間は不断に自己の欲望を満足させようと努めるが、欲求の強さは人によって異なるので、人々が満足する力や富や名誉等々のレベルは異なるであろう、ということになる。続いてホッブズは、人間の力の定義に向かう。

(2) 「人間の力 (Power) とは (一般的に考えて)、将来明らかに善であると思われるものを手に入れるために、かれが現在もっている手段である」(第十章)。

これと、命題 (1 c) および (1 d) から、次のような命題が導き出される。

(3) あらゆる人間が常になにかの力をもとうと努める。がしかし、あらゆる人間が、他の人々と同じだけの力をもつことを追求したり、自分が現在もっている以上の力を追求しようとしているわけではない。

ところで、ホッブズによれば、力には、「本源的 (ないし「自然的」) なものと、「手段的」なものがある。「自然的な力とは、肉体または精神の諸能力の卓越性である。例えば、異常な強さ、容姿、慎慮、技芸、雄弁、気前のよさ、高貴さなどがそれである。手段的な力とは、上述の力または幸運によって獲得された力で、より多くの力を獲得するための手段

であり用具である。例えば、富、評判、友人、そして人々がグッド・ラックと呼んでいる目に見えぬ神の働きなどがそれである。というのは、力の本性はこの点で、高まるにつれてますます増大する名声に似ており、あるいはまた、進めば進むほどますます速度を増す重い物体の運動に似ているからである」(同前)。

ここでマクファーンソンが注目しているのは、人間の自然的な力が人間の諸能力の卓越性 (eminence) と定義されている点である。つまり、人間に手段的な力 (富、評判、友人など) を獲得させるのは、他人の能力を上回るその人の能力の優秀さなのである。要するに、人間の力は、その絶対量ではなくその相対量によって測られるのだ。しがたって、全体としての人間の力は、他人の諸能力を超えるかれの個人的諸能力の超過分と、その超過分でもってかれが獲得することのできる力との合計から成る、ということになる。

だが、このような超過分としての力の定義は、これまでまったく述べられなかったある新しい公準を付け加えない限り成り立たない。それは、各人が欲するものを獲得しうるその能力は他の人々の能力と対立している、という公準である。そしてホップズは、ある人間の他の人間たちにたいする関係、ないしある人間の力と他の人間たちの力との関係を、実際にそのようなものとみなしていた。「ある人の力は別の人の力の効果に対立しそれを妨害するがゆえに、力は単に、ある人の力が別の人のそれをこえるその超過分 (excess) 以上のものではない。というのは、対立する同等の力は互いに滅ぼし合うからであって、両者のそのような対立が争いとよばれる」(『人間性』第八章第四節)。あらゆる人の力があらゆる人の力と対立しており、それゆえ重なり合う部分は互いに相殺されてしまうので、ある人の力は他の人々のそれを凌駕する超過部分にのみ存するというわけである。かくして、次のような新しい公準が導入された。

(4) あらゆる人の力は、他の人々の力の効果と対立しそれを妨害する。

これは自明のことであろうか。少なくともホップズはそう考えていた。かれはそれを、生理学的諸公準からの演繹とし

てではなく、観察から得られた一般化として述べているのである。第十章の残りの部分で、かれは、社会における人間たちの力の関係と、人間たちが相互に評価したり名譽を与えたりする仕方についての分析を展開しているが、その過程で、社会観察からもう一つの一般化を行っている。すなわち、

(5) 獲得されたすべての力は、他の人々の力のなにかを支配することに存する。

これは、命題(4)の系である。というのは、すべての力が対立しあっているのだから、力を獲得しうる唯一の方法は、自分の力に対立している力を服従させることだからである。(4)と(5)は、同一の観察から得られた一般化であり、ホッブズは両者を次のように要約している。「人間の価値ないし値打は、他のすべての物と同様に、かれの価格である。すなわち、かれの力の使用と引き換えに与えられるであろうだけのものである。したがって、それは絶対的なものではなく、他人の必要と判断とに依存したものである。……そして他の事物におけるのと同様に、人間の場合にも、その価格を決定するのは売り手ではなく買い手なのである」(第十章)。

社会観察から得られた命題(4)と(5)を、それ以前の生理学的諸命題に付け加えることによって、ホッブズは、人間の力にたいする欲求を、無害なものから有害なものへ変える第一歩を踏み出した。(4)と(5)が付け加えられる以前は、力への欲望は無害なもの、あるいは少なくともニュートラルなものであった。だが、様相は今やいささか変化した。獲得しうるすべての付加的な力は、他の人々の力のなにかにたいする支配から成るのだから、より多くの力を求める人々は、他の人々の力のなにかを支配しようと、つまり、自分に移転させようと努めるであろう。しかしながら、このことによつてあらゆる人が、力を求める闘いに必然的に引きずり込まれるわけではない。なぜなら、より低いレベルの力で満足する穏やかな人たちがおり、かれらは移転のあとに残された力で満足するかもしれないからである。だがホッブズは、力を求める競争的闘争は普遍的である、と主張する。ということは、かれはさらにいま一つの仮定を設けて

いる、と考えざるをえないのである。すなわち、

(6) ある人たちの欲望は無限である。

もしこれらの人たちの欲望に限りがあるとすれば、かれらが自分の欲望を満足させることと、より低いレベルの満足でどうにか済ます穏健な人々とのあいだで、なんらかの折り合いが可能になるかもしれない。ある人たちの欲望が無限である場合にのみ、他の人々も、自分たちの力が移転されることに抵抗せざるをえないという状況が生みだされるのである(そしてかれらが抵抗することのできる唯一の方法は、力を求める闘争に加わることである)。「人々の情念の多様さのゆえにかれらには大きな相違があることを考えれば、なんとある人々は虚栄的で、仲間にたいする優位と優越を望んでいることか。しかもかれらは、力において等しいときだけでなく、劣っているときでもそうなのである。このことから必然的に、自然の平等以上のものを求めない穏健な人々が、かれらを征服しようとしている他の人々の力のまえに晒されることになる、ということのをわれわれは認めざるをえない」(『政体論』第四章第三節)。このように、ホッブズは、すべての人々が生得的に絶えず他人を凌駕するより多くの力を欲すると考えてはいなかった。際限のない力を不断に追求する生得的な性向をもっているのは一部の人たちである。だが、そのような人たちの行動が、他のすべての人々を強制して力を求める不断の競争に引き込むのである。

この命題(6)を前提として、ホッブズは次のように結論する。

(7) 「私は、全人類の一般的傾向として、次から次へと力を求め、死によってのみ終熄する、止むことのない不断の欲望をあげる。その原因は、すでに到達しているよりも強烈な喜びを望むということでは必ずしもないし、またほどほどの力では満足できないということでもない。そうではなくて、十分に生きるために現在もっている力と手段を確保しうるためには、それらをさらにそれ以上獲得しなければならぬからなのである」(第十一章)。仮説的な自然状態における人

間はみな、節度のない欲望をもつ人も節度のある欲望をもつ人も、否応なく力を求める継続的な競争的闘争に引きずり込まれる、あるいは少なくとも自分の力が他人に支配されることに抵抗するよう強いられる。こうして、人間の力にたいする欲求は必然的に有害なものになる。「自然状態にある人々はみな加害の欲望と意志をもっているが、それは同じ原因から生じるのではなく、同列に断罪されるべきものではない。というのは、ある人は、われわれのあいだにある自然的平等にしたがって、自分自身に認めるのと同じだけのものを他の人々にたいしても許す。これは、自分の力を正しく評価する節度ある人の論法である。別の人は、自分が他の人々よりも優れていると思ひ込んで、勝手気ままに自分のしたい放題をしようとし、他の人々に優先して自分に与えられるのが当然であるかのように尊敬や名誉を要求する。これは、激烈な精神の持ち主の論法である。この人の加害の意志は、虚栄や、自分自身の強さについての誤った評価から生じる。他の人のそれは、このような人の暴力から、自分自身と自分の自由と自分の財産を守らなければならぬ必然性から生じるのである」(『統治と社会に関する哲学的諸原理』第一章第四節)。

これは、人間の本性についてのホッブズの分析の最も重要な結論である。全権全能の主権者への服従を説くために、これは、これに、死にたいする人間の生得的な嫌悪に関する公準と、自分たちの長期的な利益をこれまで普通に行ってきたよりも明確に見通しながら行動する人間の能力に関するもう一つの公準を付け加えさえすればよかった。

以上のようにホッブズは、社会における人間の観察からの一般化によって、さきに見たような結論に達したのであるが、そのさいかれはどのような社会を仮定していたのであろうか。マクファーンソンが言うには、それは、「各人が絶えず他の人たちの諸力のなにほどかを自分自身に譲渡するよう求めることのできる社会である。／いかなる社会もこのことが個人的暴力によって行われるのを許容するはずはなからう。もしすべての人々のあいだにそのような不断の闘争があると

したら、いかなる社会も、勿論いかなる文明社会も存在しえないであろう。しかしホッブズは、他人たちを凌駕する力を得ようとするあらゆる人たちのこの不断の努力が、文明社会における人々の実際の行動であると認める。……ホッブズはこの必然的な行動を社会における人間たちに帰属させているのであるから、かれは、あらゆる人が誰でも社会を破壊することなしに、他人たちを凌駕する力を不断に求めることのできる平和的な、非暴力的な方法を備えた、ある種の社会を仮定しているにちがいない。」「そこでわれわれは、どのような種類の社会がこの仮定と一致しているかを探求しなければならない。」この問題にたいするマクファーンの見解は、すでに本稿の初めのほうで触れたように、かれが「所有的市場社会」(possessive market society)と呼ぶ種類の社会だけがホッブズの論証の要件に適合しており、ホッブズは多かれ少なかれ意識的にその種類の社会をかれの社会そのもののモデルとして想定していた、というものである。このようなマクファーンの主張を理解するためには、この所有的市場社会について若干の説明を要する。

所有的市場社会の本質的な特徴は、これまたすでに述べておいたように、第一に完全に競争的な市場社会であること、第二に労働力の商品化と、したがってまた力の平和的な移転が許容されている社会である、という点にある。マクファーンによれば、このような社会は、その存続のために、法の強制的枠組を必要とする。最小限、生命と所有が保証されなければならぬし、契約が決定されて実施されなければならないからである。だがこのモデルは、この最小限をはるかに越える国家の活動をも許容しうる。国家は土地や労働の使用を統制したり、通商条約や関税によって貿易の自由な流れを規制したり、ある種の産業を奨励し他のそれを抑制したり、市場に干渉を加えて価格の水準を上下させることができる。しかし、これらの政策によって国家は、各人が最も有利な行動方針を計算するさいに立てる方程式の項のいくつかを変更しうるにすぎない。国家は競争の邪魔をすることなしに、いわばある種の競争者に有利になるようにハードルを移動したり、あるいはハンデキャップを変更しうるのである。このように、所有的市場モデルにとってレッセ・フェールの国家政

策は必須事項ではない。重商主義的政策はこのモデルと決して矛盾しないし、また実際それは所有的市场社会の發展上のある段階において必要とされるのである。

所有的市场社会の決定的な特徴としてマクファーンソンが強調しているのは、国家の活動がどの程度であろうと、その社会は、自分が現にもっている以上の喜びを欲する諸個人に、他の人々の自然的諸力を自分たちの使用のために転用しようとすることを許容する社会、競争的な市場関係を通じて力の合法的な移転が実現される社会だということにほかならない。「かれらは、誰もが必然的に巻き込まれる市場を通じてそうするのである。市場は絶えず競争的であるから、自分が現にもっている満足の水準に甘んじようとしている人々も、自分の満足を増加させようとする他の人々のあらゆる試みによって、新たな尽力へと駆り立てられざるをえない。」自分の現にもっている水準に満足しようと思っている人々も、他の人々の競争的努力が自分から奪った力を補うために、かれらからより多くの力を自分自身に移転することによって、やっとその水準を維持することができるのである。かくして所有的市场社会だけが、上述の三つのモデルのなかで、ホップズが暗黙の前提としていた社会の本質的諸要件に適合する唯一のものだということになる。なぜなら、「各人の労働能力が自分自身の所有物で、譲渡可能であり、市場商品であるような社会においてのみ、すべての個人がこの絶えざる競争的力関係に入ることができらるであろう」から。

以上のようなマクファーンソンのホップズ解釈にたいしては、当然のことながらいくつかの反論が提出された。D・ミラーは、それらの批判点を次の五つに要約している。⁽²⁾第一に、そしておそらく最も決定的な点であるが、ホップズが人間たちの関係を生得的に競争的なものと見ていたことは疑いなくとも、かれは経済的競争が人間の状態にとって中心的なものだとは考えていなかった。実際、かれにあっては、力が富を得るための手段として評価されるよりも、むしろ富が

力の源泉として評価されているのである。不断に力を求め、他の人々の力を自分自身に移転しようとしている人間たちについて語るとき、ホッブズが念頭に置いていたのは、企業者たちの市場的競争ではなくて、安全なき世界において安全を求めている人間たちの政治的競争であった。第二に、ホッブズは、人間たちを第一義的に財の消費者としては見ていない。かれは、人間たちはなによりもまず恐怖心の塊りであるが、また同時に（自分の評判を異常なまでに気にかけるけれども）潜在的な社交性をもっていると見ていた。さらにかれは、消費にたいする欲望に関しては曖昧な態度をとっており、過度の獲得を自然法に反するものとみなしている。第三に、かれの道徳的諸価値——名誉、勇氣等々へのかれの関心——は、ブルジョアのというよりも貴族的とみなすほうがよい。第四に、かれは社会を、経済的市場ではなく、家父長的諸関係が依然として重要な意味をもっているランクづけられた秩序とみなしていた。最後に、かれは、国家の目的は社会的平和の維持に存すると見ており、そのためには、所有権は神聖不可侵の自然権であるよりも、政治的決定に従属すべきであると考えていた。

いちいち尤もな指摘であると思う。次節において私は、これらの批判と異論を参考にしながら、ホッブズの世界とその人間像について若干の考察を加えてみるつもりであるが、そのまえにここでは、まずホッブズの競争社会がどのような型の競争社会であるかを確認したうえで、それが力の平和的な移転を許容する所有的市場社会であるというマクファーンソンの説にたいする疑問を述べてみたい。

すでに詳しく見たように、ホッブズが描いている社会におけるすべての人々の必然的行動は、他人を凌駕する力を求めて止むことのない闘いである。もはやくだくだしく説明するまでもないと思われるが、このような差異としての力を追求するかれらの行動は、差異としての特別剰余価値の獲得をもくろんで生産力の上昇に努める資本家の行動や、同じく差異

としての企業者利潤を手に入れるために新結合の遂行を目指して邁進する企業者の行動と論理的に同型なのである。ホッブズの自然状態は、マルクスの特別剰余価値論の世界およびシュンペーターの新結合の理論の世界と相似関係にある、と言ひ換えることもできるであろう。だが、このホッブズの競争社会は、マクファーンソンが主張するように、力の平和的な移転を許容する所有的市場社会であろうか。私は、二つの理由から、そうではないと考える。

第一の理由は、ホッブズの競争社会はマルクスの特別剰余価値論の世界およびシュンペーターの新結合の理論の世界と同型であるという、たったいま確認したばかりの事実そのものにある。マクファーンソンが力の平和的移転という論理で捉えようとしている社会的現象は、資本・賃労働関係に基づく他人労働の領有、すなわち搾取という事態以外の何物でもない⁽³⁾。ところが、シュンペーターの新結合の理論は、前節で見たように、平均利潤の存在しない、それゆえ搾取のない世界なのである。マルクスについて言えば、特別剰余価値は搾取を媒介として発生するものであるが、特別剰余価値論の世界は、それ自体としては、搾取そのものが問題になる次元とは異なる理論的次元に属している。ホッブズの競争社会が特別剰余価値論の世界および新結合の理論の世界と同型であるという事実は、それがこれら両者と同様に搾取が問題になる世界とはその次元を異にしていることを意味している、と解してさしつかえないであろう。ホッブズの競争的社会は、搾取に基づく平均利潤のない、もしくはそれとは次元を異にする、超過利潤あるいは企業者利潤だけの世界なのである。マクファーンソンは、「非市場社会のトップにある人たちの諸関係は、市場関係に近似したところの、力を求める競争的闘争において成り立つ傾向にあった」と言っているが、かれらの競争的闘争は、他を出し抜いて特別剰余価値を獲得しようとして狙っている資本家どうしの競争、あるいは企業者利潤を手に入れるため革新をめぐるしのぎを削る企業者どうしの競争に似ていたにちがいない。

マクファーンソンが指摘しているように、ホッブズは確かに「人間の労働もまた他のどんなものとも同じように、利益を

得るために交換できる商品である」(第二四章)と述べている。だがホッブズは、その交換によってある人から別の人への力の移転が行われるなどとは考えていなかった。労働が一種の商品であることを認識すること、その交換を通じてなされる力の移転(搾取)を発見することとのあいだには、大きな隔りがある。ホッブズの競争社会では、あらゆる人の力が対立しており、それゆえある人の力の増大は不可避的に他の人々の力の相対的な低下として結果せざるをえないが、そうした力の増大が力の移転によって実現されるなどというホッブズの説明は見出されないのである。

第二の理由は、力の平和的な移転を許容する所有的市場社会こそ、ホッブズが暗黙に仮定していた社会のモデルであるというマクファーンソンの主張は、かれが同時に行っている別の主張と矛盾する、ということにある。すなわち、マクファーンソンは、力の平和的移転(搾取)を可能ならしめる階級分割の存在する社会——自らの労働を売って賃金を得る以外に生計を立てる術をもたぬ人々と、他の人々(の労働)を雇用することによってかれらの力の一部の自分自身への移転を獲得する有産者とが存在する社会——がホッブズの社会モデルに適合的であると一方で主張しながら、他方で、ホッブズは、市場社会における断片化する諸力を相殺する階級的凝集力の可能性を見逃し、かれのモデルから階級分割と階級的凝集性を除外したがゆえに、自己永続的主権機関が必要であるという誤った結論に導かれたのだ、と論じている。この議論は私には自家撞着に陥っているように思われる。

マクファーンソン自身が認めているように、当時のイギリス社会に階級分割が存在しているという事実を見落してしまふほどホッブズは盲目ではなかった。では、どうしてかれは階級分割を組み込んだ社会モデルを構成しなかったのであろうか。有産階級の階級的凝集力を見損なっただからだというのがその理由らしいが、ではもう一步突っ込んで、何故ホッブズはそのような凝集力を十分に評価することができなかったのだろうか。それはおそらく、ホッブズが力の移転という事実をかれの社会モデルの本質的特徴として認識していなかったからにちがいない。かれは、階級分割の事実を認識していた

けれども、それが力の移転を伴い、かつ力の移転によって維持されているとは考えていなかったにちがいない。ホッブズは、社会を不安定にさせる競争的闘争のすさまじい力に目を奪われ、階級的秩序に安定性を与え、それを維持する継続的な力の移転を看過したがゆえに、秩序と平和を確保するためには自己永続的主権機関が必要であるという結論に導かれざるをえなかったのだ、と考えるのがリーズナブルではなからうか。だが、もしこう解釈するほうが正しいとすれば、マクファーソンが行っているように、力の移転を不可欠の要件とする所有的市場社会のモデルをかれに押しつけるのは、不当だということになるであろう。

(注)

(1) ルソーによるホッブズ批判の矢が向けられているのは、まさにこの点にたいしてである。「ホッブズは自然法の近代のすべての定義の欠陥を非常によく見てとった。しかしかれが自分の定義から引き出した結果は、かれがやはり間違った意味にそれを解していることを示している。この著者は自分の定めた原理について推理するとき、自然状態とはわれわれの自己保存のための配慮が他人の保存にとって最も害の少ない状態なのだから、この状態はしたがって最も平和に適し、人類に最もふさわしいものであった、と言うべきであった。ところがかれは、未開人の自己保存のための配慮のなかに、社会の産物であり、法律を作る必要を生み出した多くの情念を満足させたいという欲求を、故なくして入れた結果、まさに反対のことを言っている」(『人間不平等起源論』本田喜代治・平岡昇訳、岩波文庫、七〇ページ)。つまり、ホッブズがその国家論の前提に据えた人間の本性(自然)は、実はすでに文明によって変質・汚染された人間の本性にはかならない、というのがルソーの批判の枢要点である。この問題については、内田義彦『社会認識の歩み』岩波新書、一四二ページ以下を見よ。

(2) Miller, D., *The Macpherson Version, Political Studies*, 30 (1982), pp. 123-124.

(3) これについては、前掲拙稿、二五八ページ以下を参照。

III ホッブズにおける情念の世界

アルバート・O・ハーシュマンによれば⁽¹⁾、ルネサンス期になると、人間の破壊的な情念を制御する務めをもちや宗教的戒律に任せておくことはできないという気運が起こり、そこから情念を制御する新しい方法を見つげるために、極めて当然のことながら人間をあるがままの姿において見るものが強く要請されるようになった。「私の目的は、それを理解する人々に役立つものを書くことにある。私には、空想の世界よりもむしろ具体的事実が示す真理の世界を追求するほうが役立つと思われる。これまで多くの人々は、実際には見たことも聞いたこともない共和国や君主国を空想のなかで描いてきた。だが、人々がいかに生きているかということ、いかに生くべきかということのあいだには非常な相違があるので、為すべきことのために実際に為されていることを無視してしまうような人は、自己の保存よりもむしろ破滅を知ることになるのである」(マキャヴェリ『君主論』第十五章)。そしてこのような現実主義的な人間観は、「科学革命の時代」とも呼ばれる十七世紀には強い確信として定着するようになり、かくして人間性の詳細で容赦のない解剖が始まった。ディルタイは、生の哲学の形成史という観点から「十六世紀と十七世紀の文化における人間学の機能⁽²⁾」を問題にし、十七世紀における人間学(Anthropologie)の固有の機能は、十六世紀の人間学をさらに発展させながら、情念論から「生き方」(Lebensführung)の理論を基礎づけることであった、と述べているが、ホッブズの『リヴァイヤサン』は言うまでもなくそうした試みの一つの壮大な代表にほかならない。本節では、ホッブズの情念の世界とそこに生きる人間の諸々の情念に関するかれの見方を考察することにより、マクファーンソンのホッブズ解釈にたいして若干のコメントを加えてみたい⁽³⁾。

すでに一度引用したように、ホッブズはこう述べていた。「人間の価値ないし値打は、他のすべての物と同様に、かれ

の価格である。すなわち、かれの力の使用と引き換えに与えられるであろうだけのものである。したがって、それは絶対的なものではなく、他人の必要と判断に依存したものである。……そして他の事物におけるのと同様に、人間の場合にも、その価格を決定するのは売り手ではなく買い手なのである。というのは、(大抵の人がするように)自分にできるだけ高い価値を付けさせようとしても、その真の価値は他人が評価する以上のものではないからである」(第十章)。この箇所を一つの決定的な論拠としてマクファーンは、「人間の力は、その規則的な取引が市場価格を確立するところの商品として扱われている」とか、「ホッブズのモデルには、人間のメリットについて、現実の市場査定以外にならメリットの尺度はない。ホッブズのモデルには、身分モデルの場合のように、様々な人間たちが社会全体の目的に寄与する貢献の見地から、あるいは社会的有機体の機能的部分としての人間たちの必要の見地から、かれらのメリットを査定する余地はまったくない」と主張する。

しかし、この解釈はミスリーディングである。なぜなら、身分社会における人間と人間との関係があまりにも全体主義的に捉えられていることは措くとしても、K・トーマスがマクファーンの解釈を批判して述べているように、ここでホッブスが問題にしているのは、「決して初期資本主義社会における経済的取引ではなく、むしろ、いかなる社会であれ、人間の評判というものは定義からして『他人が評価する以上のものではない』⁽⁴⁾という、評判の本質」だからである。この点は、さきの引用に続けてホッブズが述べていることから明白である。曰く、「われわれが互いに付与しあう価値の表明は、通常、名誉を与えるとか、不名誉にすると呼ばれているものである。ある人を高く評価するのは、かれに名誉を与えることであり、低く評価するのは、かれを不名誉にすることである。もっとも、高いとか低いというのはこの場合、各人が自分自身に付与した評価額との比較で理解されるべきことである」(同前)。このことは、なにも市場関係の広がりという意味しない。評価は他人の意見に依存せざるをえない⁽⁵⁾、ということの意味するにすぎない。

また、「ホッブズは社会を完全に市場に還元し、市場関係から演繹不可能な道徳的原理の余地を見出さなかった」というマクファーンソンの主張にたいしても、容易にその反証を挙げることができる。「ある人が食物その他の生活に必要な物に欠乏して、法に反するなんらかの行いによる以外の方法で自己を維持しえない場合、例えば、大飢饉においてかれが、貨幣によっても慈善によっても得られない食物を力づくで取ったり、盗んだりした場合や、自分の生命を防衛するために他人の剣を奪い取る場合には、かれは、すぐまえて論じられた理由によって、全面的に免罪される」(第二十七章)。ここでいう「すぐまえて論じられた理由」とは、「もしある人が、現在の死の脅威によって、法に反する行いをなすように強制されるならば、かれは全面的に免罪される。なぜなら、いかなる法も、ある人に自分自身の維持を放棄するよう義務づけることはできないからである」(同前)、というものである。生きのびるために盗むことは罪にあらず、というこの原理は、市場社会のメカニズムならびにその前提となっている絶対的で排他的な私的所有権に真向から抵触するものであること、特に説明を要しないであろう。ここに象徴的に示されているように、ホッブズにとって「最大の価値あるものは、所有権ではなく生命⁽⁶⁾」なのである。生命への権利、すなわち自己保存の原理のまえでは、所有権といえども、決して神聖不可侵の権利たりえないのである。ホッブズの世界においては、自己保存の原理こそがアルファでありオメガなのであった。

この点に関してホッブズからの引用をいまま少し続けければ、「ところで、諸々の善のなかで第一のものは誰にとっても自己保存である。なぜなら、自然によって、すべての人は健やかであることを欲するようにつくられているからである」(『人間論』第十一章第六節)。「人は誰でも自分にとって善なるものを欲し、悪なるものを、主として自然的諸悪の最たるものである死を忌避する。しかもかれはある自然の衝動によってそうするのであって、それは自然の衝動によって石が落下するのと同然である。したがって、人間が自分の身体と四肢を死や悲しみから保護し防衛すべくあらゆる努力を払う

のは、決して馬鹿げたことでも非難されるべきことでもなく、また真の理性の命令に反することでもないのである」(『統治と社会に関する哲学的諸原理』第一章第七節)。それゆえ、臣民たちの安全を保障しえなくなった主権者は即刻その資格を喪失する。「主権者にたいする臣民たちの義務は、主権者がかれらを保護しうる権力をもち続ける限り、そしてその限りにおいてのみ、継続するものと解される。というのは、自分を保護してくれる者が自分以外に誰もいない場合に自己防衛する生来の権利は、いかなる信約によっても譲渡しえないからである。……服従の目的は保護にある。自分自身の剣によるにせよ、他人の剣によるにせよ、保護が得られる場合にはいつでも、自然は人間をしてそれに従わしめ、その維持に努めさせるのである」(第二章)。生命への権利と自己保存の原理の至上性、まずこの点を確認したうえで、以下では、ホッブズの世界をアダム・スミスの世界と対比することによって、それが決して市場価格以外の価値(評価)の尺度をもたない専一的な市場社会ではないこと、また『リヴァイアサン』を構成する人間たちが決して——マクファーソンがそうしているように——「ブルジョア的人間^(?)」と呼べるようなエートスをもった人々ではないこと、を明らかにしよう。

「ホッブズ氏が言うように、富は力である。けれども、大財産を獲得したり、相続する人は、必ずしも市民または軍人としての政治力を獲得したり、相続するとは限らない。かれの財産は、おそらくその両者を獲得する手段をかれに与えるのであるが、この財産をただ所有しているというだけでは、必ずしもそのいずれかがかれにもたらされるとは限らないのである。その所有が直ちにしかも直接にかれにもたらす力は、購買力、すなわち、そのとき市場にある一切の労働または一切の労働生産物にたいする一定の支配である。」これは、『国富論』第一編第五章の有名な一節である。スミスの主張の趣旨は極めて明快であるが、ホッブズの言わんとするところを正確に伝えてはいない。スミスがここで言及しているのは、『リヴァイアサン』の次のような箇所である。「気前のよきと結びついた富もまた力である。なぜなら、それは友人

や使用人をもたらずからである。しかし、気前のよさがなければ力ではない。なぜなら、この場合には、富は人々を守らないで、逆に妬みの餌食にするからである」(第十章)。「気前のよさ」(liberality)とは、ホッブズによれば、「富の使用にあたっての大度(magnanimity)」を意味する(第六章)。

富は気前のよさを伴ってはじめて力たりうる、とホッブズが言っている点に注目したい。ここにホッブズとスミスの世界の相違が明瞭に現われているからである。本稿の最初のほうで結論を先取りするかたちで述べておいたように、ホッブズの世界は、決してプライス・メカニズムが唯一の支配原理であるような市場社会ではないのである。スミスの場合、富はなによりもまず市場関係の枠内でその効力を発揮するものとして捉えられている。これにたいしホッブズにあっては、富の大きさを決定するのは市場の作用だけではない。一定の富がどれほどの効力を発揮できるかは、その所有者の気前のよさといった一種の徳によって大いに左右されるのである。『リヴァイアサン』の人間は、純粋なcash-nexusの關係に解消することのできない、ある種の「virtue-nexus」の世界の住人なのである。ホッブズの世界の人間たちは、市場關係を人間たちの唯一の社会的關係とみなす経済学に出てくる人間類型たるホモ・エコノミクスよりも、むしろ文化人類学の登場人物たちに似ている、と言え言い過ぎかもしれないが、少なくともそのような一面をもっていることだけは確かである。

両者による節儉ないし儉約にたいする評価の相違も、これとパラレルな關係にある。周知のようにスミスは、「勤勞ではなく、節儉(Parsimony)こそが資本増加の直接的原因である」(『国富論』第二編第三章)と論じ、儉約を大部分の人々の日常的行動における支配的原理とみなした。「無駄使いについて言えば、支出を促す原理は、目前の享樂にたいする情念であって、それはときには激しくて抑制することが非常に困難ではあるけれども、概して瞬間的で偶発的なものにならざるを得ない。しかし、貯蓄を促す原理は、われわれの境遇を改善したいという欲望であって、それは一般に穩やかで冷靜なものである。

のではあるけれども、母親の胎内からわれわれに同行してきたもので、われわれが墓に入るまで決してわれわれから離れることのない欲望である。およそどのような人でも、生まれてから死ぬまでの全期間を通じて、どのような種類の変更も改善も欲しくないくらい自分の境遇に満足しきっているようなことは、ただの一瞬時もないであろう。財産を増やすことは、大部分の人々が自分たちの境遇を改善しようと企てたり望んだりするとき用いる手段である。これが、最も通俗的で最もあたりまえの手段である。そしてかれらの財産を増やす最もあつらえむきの方法は、自分たちが獲得するもののある部分を、規則正しく毎年、またはなにか特別の機会に、貯蓄し蓄積することである。そういうわけで、支出の原理は、ある場合にはほとんどすべての人を支配し、また人によってはほとんどすべての場合にこの原理によって支配されているけれども、大部分の人々についてその全生涯を通じての平均をとってみれば、儉約 (frugality) の原理が優位を占めており、しかもその度合いは非常に大きいように思われるのである」(同前)。

では、ホッブズの場合はどうであろうか。「ものが潤沢にあるのは、神の恩寵について、まったく人間の労働と勤勉によるのである」(第二四章)。「富が勤労によって得られ、儉約によって保持されることを知らない者はいない」(『統治と社会に関する哲学的諸原理』第十二章第九節)。一見したところ、ホッブズの現実認識はスミスのそれとあまり違わないようにも見える。しかし、かれが提案する富国政策は、その基調においてやはり依然として重商主義的である。「臣民を富ませるのに必要なことは、二つある。労働 (labour) と節約 (thrift) がそれである。また役に立つ第三のものがある。それはすなわち、大地と海川の収穫である。さらに第四のもの、つまり戦役がある。これは、ときには臣民の財産を増やすこともあるけれども、減少させることのほうがずっと多い。……したがって、臣民を富ませることに役立つことは、大地と海川の産物、労働、節約の三つだけなのだから、最高司令官の任務はもっぱらこれら三つのことがらに精通することであるだろう。一番目のことに関しては、農業や漁業のごとき、大地と海川の収穫を増進するような技術を奨励する諸法

が有用であろう。二番目のことに関しては、怠惰を防ぎ勤勉を呼び起こすようなすべての諸法が有益である。このような法によって、航海術（この助けによって、全世界の諸商品がほとんど労働だけによって購入され一国にもたらされるのである）、機械学（私はこの語で極めて優れた職工たちのすべての技術を理解する）、および数学（航海術と機械学の源泉）は、しかるべき評価と名誉を受けることになる。三番目のことに関しては、食事や衣服、おしなべてすべての消費財への法外な支出を禁ずる諸法が、有用である」（同、第十三章十四節）。だが、われわれがスミスとの比較においてなによりも注目すべき決定的に重要な点は、ホッブズによる儉約の評価が極めてネガティブであるということである。「儉約 (Frugality) は、（貧しい人々においては）一つの徳であるが）、人をして、多数の人間の力を同時に必要とするような行為をなすのに不適切ならしめる。というのは、それは、報償によって力づけられ、活気を保たれるようなかれらの努力を弱めるからである」（第十一章）。また別の箇所で曰く、「富を使用するにあたっての大度は、氣前のよさである。／同じことを行うにあたっての小心は、けち (wretchedness)、しみつたれ (misableness)、吝嗇 (parsimony) である」（第六章）。

現実の資本蓄積がもっぱら禁欲的な儉約強制に基づいて行われたという物語は、近代資本主義の生成過程を美化するイデオロギー的神話であるとしても、儉約が「向上すべく努力しつつある産業的中産者層」（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）の重要な徳目の一つであったということは、マックス・ウェーバーが「資本主義の精神」を例示する資料として挙げているベンジャミン・フランクリンのエートスを引き合いに出すまでもなく、紛れもない事実である。そしてこのような儉約をモットーとする生活倫理に生きる人々こそ、「ブルジョア的人間」と呼ばれるにふさわしい人間類型ではあるまいか。ところが、ホッブズの情念の世界においては、そうしたコツコツ稼いでシコシコため込むようなタイプの人間は、軽蔑の対象にこそなれ、決して称賛に値する人物とみなされることはない。

「莫大な富への貪欲や大きな名誉への野心は、それらを手に入れようとする力のしるしであるから、名誉あるものであ

る。僅かな利得や昇進にたいする貪欲や野心は、不名誉なことである」(第十章)。「富は名誉あるものである。それは力だからである。貧困は不名誉なことである。大度、気前のよさ、希望、勇氣、信頼は名誉あるものである。それらは、力を意識することから生じるからである。小心、吝嗇(parsimony)、恐怖、不信は不名誉なことである」(同前)。何が名誉あることで何が不名誉なことかについてのこのような説明にはつきりと示されているように、ホッブズの情念の世界は「ブルジョアの人間」の情念の世界とは異質なものを含んでいる。そしてさきほども指摘したように、とりわけ、スマスが浪費(prodigality)や不始末(misconduct)との対比において積極的な意味を与えた「parsimony」(節儉)は、ホッブズの価値体系においては、倫理的な美德であるどころか、極めてみすぼらしい情念に属するのである。アダム・スミスもまたホッブズと同様に、「しみったれた儉約」(parsimonious frugality)、「骨の折れる勤勉」、「規則の厳格な固執」を、「下層階級の人々の徳」として語っているが、しかしそこでかれは同時にこう言明している。すなわち、これらの徳を「卑しくて不快なもの」と考えるのは「軽薄な心の持主」であって、かれらがそう考えるのは、かれらがこれらの徳を、それらが「通常属している地位の卑しさと結びつけるとともに、そのような地位に常に伴うとかれらが想定する、多くの大悪徳、つまり、卑劣で、臆病で、意地悪で、嘘つきで、こそ泥的な性向と結びつける」からである、と(『道徳感情論』第五節第二章)。

以上の考察から明らかのように、人工人間としての『リヴァイアサン』の素材でありまた製作者でもある人間たちの主要部分を「ブルジョアの人間」と呼ぶことはまったく見当違いであらう。そして、「ホッブズの道徳は本質的にブルジョア的道徳である」⁽⁸⁾とか、「ホッブズの人間性分析は、……実際にブルジョアの人間の分析である」⁽¹⁰⁾というマクファーンソンの主張が的はずれであることは、ホッブズが情念の虜である人間について語るとき、かれが主として念頭に置いていたのはどのような種類の人々であるかを見ることによって、より一層明白になる。

ホッブズによれば、人々に畏怖の念を抱かせ、かれらに信約の履行と自然の諸法の遵守を処罰によって強制する目に見える権力がない場合には、人々の自然的諸情念から必然的に悲惨な戦争状態が生じる。「というのは、自然の諸法が、……なんらかの権力の威嚇なしに、それ自身だけで守られるなどということは、……われわれの自然的諸情念に反するからである。そして信約は、剣なくしては単なる言葉にすぎず、人間を保護する強さをまったくもたないのである」(第十七章)。このように強烈な情念に終始突き動かされている人々とは、どのような種類の人間なのであろうか。それは、社会の上層部に属する人々である。「誰も生来、名誉と昇進を求める。がしかし、主として必需品にたいする心配に煩わされることの最も少ない人々」が最も執拗にそれらを追求するのである(『統治と社会に関する哲学的諸原理』第十二章第十節)。「なにもしないでいられる余暇を最も多くもっている人々が、国家にとって最も厄介である。というのは、飢えと寒さに打ち勝つまでは、人々は公的な地位を求めて競わないのが常だからである」(同、第五章第五節)。ホッブズの情念論においては、貧しい人々は名誉への強い関心をもっていない、もしくはもつ余裕などない、と想定されているのである。

ハーシュマンが言うように、「長い伝統から見て、貴賤さまざまの情念に突き動かされたのは何よりも貴族であり、こうした情念が義務や理性の命ずるところと衝突し、あるいは情念同士が互いにぶつかりあったのである。……さまざまな情念とそこから生ずる葛藤を扱った典型的な悲劇その他の『純』文学において、主要人物にふさわしいと見なされたのが古今の貴族だけだったのはまさにこうした理由による」⁽¹¹⁾抑制することのできぬ強烈な情念に突き動かされて行動する人々としてホッブズが表象に浮かべていたのは、ルネサンス期に現われてくる、家柄(Birth)よりも徳(Virtue)、マキャヴェリ的意味での徳を重んじるようなタイプの貴族であった。⁽¹²⁾そしてホッブズによれば、この「徳(Virtue)」は一般に、あらゆる種類の問題において、卓越性(eminence)のゆえに評価されるなにかであって、比較に基づくものである。というのは、もしあらゆる物事がすべての人々において等しいならば、なにも誉めたたえられはしないだろうからであ

る」(第八章)。

これにたいして「一般人はそんなに複雑だとは思われていなかった。一般人の主たる関心は生計と物質生活の向上であり、概して生活のための生活に終始し、せいぜい尊敬と羨望を得るための手段としてのそれに関心を持っていた。したがって一般人は情念を持ち合わせていないか、あるいは情念を持っていても利益追求によって満たされると考えられていたのである。」⁽¹³⁾「ここでいう「利益追求」とは、言うまでもなく、莫大な富への食欲ではなく、しみったれた儉約による物質的な幸福の改善を意味する。ホッブズは、このような「必需品にたいする心配に煩わされる」下層階級の人々を、名誉を求める競争から明示的に排除しているのだから、かれが人間の様々な情念を分析するさいに暗黙のうちに考察の主たる対象としていたのは、「なにもしないでいられる余暇を最も多くもっている」⁽¹⁴⁾貴族であった、と考えるのが自然であろう。

(注)

- (1) アルバート・O・ハーシュマン『情念の政治経済学』佐々木毅・且祐介訳、法政大学出版局、一九八五年、九ページ以下を参照。
- (2) Dilthey, W., Die Funktion der Anthropologie in der Kultur des 16. und 17. Jahrhunderts, *Gesammelte Schriften*, Bd. II, 8. Aufl., 1969, S. 416-492.
- (3) 本稿では詳しく述べる機会をもたないが、ホッブズの家概念に暗示されている「秩序」観が、なお伝統的「身分制社会」から近代「市民社会」への過渡状況を反映していることについては、成瀬治『近代市民社会の成立——社会思想史的考察——』東京大学出版会、一九八四年、一〇三—一〇四ページを参照。
- (4) Thomas, K., *The Social Origins of Hobbes's Political Thought*, *Hobbes Studies*, ed. by K. C. Brown, 1965, p. 230.
- (5) ルソーはこの点に、文明人の一種の疎外状況を見ている。「未開人は自分自身のなかで生きていたいとして、社会人は常に自分の外にあり、他人の意見のなかでしか生きられないのである。そしていわば、かれは自分自身の存在の感情を他人の判断の

みから引き出してゐるのである」(前掲書、一二九ページ)。

- (6) Thomas, *op. cit.*, p. 225.
- (7) Macpherson, C. B., *Hobbes's Bourgeois Man, Hobbes Studies*, pp. 169-183.
- (8) ちなみに、フランシス・ヘーコンの『随想集』には、次のような記述がある。「富を蓄える道はいろいろあるが、その大部分は不潔である。けち (frugality) は最上の方法の一つであるが、それでも無善ではない。そのために人々は施し (liberality) や慈善の行為を控えるからである」(『ヘーコン随想集』渡辺義雄訳、岩波文庫、一五八ページ)。
- (9) (10) Macpherson, *op. cit.*, p. 170.
- (11) ヘーシェマン、前掲書、一一二ページ。
- (12) Thomas, *op. cit.*, p. 192. 『君主論』で展開されているマキャヴェリの徳(ヴィルトウ)概念については、内田義彦、前掲書、五〇ページ以下を参照。
- (13) ヘーシェマン、前掲書、一一二—一一三ページ。
- (14) Thomas, *op. cit.*, p. 191.

引用文献(但し、注に挙げられたものは除く)

I に関して

- ① 岩井克人『ヴェニス商人の資本論』筑摩書房。
- ② マルクス『資本論』第一卷(邦訳多数あり)。
- ③ シュンペーター『資本主義・社会主義・民主主義』中山伊知郎・東畑精一訳、東洋経済新報社。
- ④ シュンペーター『経済発展の理論』塩谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳、岩波書店。
- ⑤ ワルラス『純粹経済学要論』久武雅夫訳、岩波書店。

II および III に関して

- ⑥ C. B. Macpherson 『所有的個人主義の政治理論』藤野渉・将積茂・瀬沼長一郎訳、合同出版。
- ⑦ C. B. Macpherson, *Introduction to Leviathan* (Pelican Classics), 1968.